

イザヤ書 28章 14-22節

ヘブライ人への手紙 第12章 18-19、22-29節

ルカによる福音書 第13章 22-30節

8月も半分を過ぎました。教会の敷地は風通しが大変良いのですが、朝方の風は、少しだけ秋を感じます。しかし、日中の暑さは変わりません。皆さまも、熱中症にはお気を付けください。相変わらずコロナ禍が続いています。今まで通りの感染対策を徹底していきたいと思えます。新しい「聖鐘」が発行されました。編集・発行を担当して下さった方々ありがとうございました。皆さまどうぞお読みください。

本日の旧約日課「イザヤ書」は、新共同訳の小見出しに「シオンの隅の石」とあります。それは、その石がシオン（エルサレム）の人々、ことに冒頭にある「嘲る者、エルサレムでこの民を治める者」（イザヤ 28:14）の信仰を試すしるしであるからです。

預言者イザヤは、南ユダ王国の時代に活動した預言者です。それゆえ「治める者ら」は、その時代に南ユダ王国を支配した、王など支配者層ということになります。ただし、初期イザヤの時代に王様であったウジヤ王もヒゼキヤ王も、比較的宗教的にも政治的にも良好な王でした。そう考えますと、この部分は、それらの王ではなく、異なる時代の王や支配者層についてということになります。

「治める者ら」の言動は、イザヤの批判の言葉からわかります。彼らは、「我々は死と契約を結び、陰府と協定している。洪水がみなぎり溢れても、我々には及ばない。我々は欺きを避け所とし、偽りを隠れがとする」（イザヤ 28:15）と、自らの悪を隠すことなく誇り、主なる神様と正反対の方向を向いていたようです。そのような者たちに対して預言者イザヤは、「わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。信ずる者は慌てることはない」（イザヤ 28:16）と主なる神様の側に立つ人か否かを判断する「一つの石」を置くと言語しています。

その石についての「試みを経た」とは、「試験を経た、試された」という意味です。直接的には石の材質を試したという意味ですが、暗示している事柄は、主なる神様に対する人間の対応を試すために機能するかどうかということです。さらにその石は「堅く据えられた礎の、貴い隅の石」と説明されています。この部分は口語訳では「堅くすえた尊い隅の石」となっていました。また、新しい聖書協会共同訳では「確かな基礎となる貴い隅の親石」となっています。訳が微妙に異なりますが、それは「すえる、基礎を置く」という動詞と「確かな、堅い」という形容詞が同じ語源であり、重ねて用いられているからです。それだけ確かな石がしっかりと置かれると言語しているの

です。「**尊い隅の石**」は、「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった」（詩編 118:22）や、イエス様のその引用の言葉「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」（マルコ 12:10）を想起させます。「**試みを経た石**」という部分の「石」という言葉が、「親石」と同じ言葉です。その意味では、内容的にも詩編やイエス様の言葉と共通するといえるでしょう。

ただし、「**信ずる者は慌てることはない**」とあります。「慌てる」とは原語でも「急ぐ、早くする」ことです。しっかりと主なる神様を信じている人は、慌てる必要はないのです。なぜならば、「隅の石」は、裁きのように機能するのですが、主なる神様を信じている人にとってその裁きは、その人が正しいことを明確にして、守ることになるからです。

その石がどのような形で働くのか、それが「**わたしは正義を測り縄とし、恵みの業を分銅とする。雹は欺きという避け所を滅ぼし、水は隠れがを押し流す**」（イザヤ 28:17）という部分で補足されます。「測り縄」と「分銅」は、測定、計量に用いる道具です。主なる神様の正義と恵みは、主なる神様の尺度でしっかりと実行されるのです。また、主なる神様を嘲る人間たちが作り上げた「**欺きや隠れ家**」は、雹や水などの自然災害をたとえられるように無力になるのです。預言者イザヤは、「嘲る者たち」の言動を見過ごさず、彼らには人間が実感できる形で、意志が働くと言っているのです。

それゆえに、「**お前たちが死と結んだ契約は取り消され 陰府と定めた協定は実行されない。洪水がみなぎり、溢れるとき お前たちは、それに踏みにじられる。**」（イザヤ 28:18）」と非常に厳しい主の言葉が続きます。さらには、「**この御告げを解き明かせば、ただ恐怖でしかない**」という厳しい言葉も続きます。このイザヤの言葉を、理解すればするほど、主なる神様を嘲る人々には恐怖でしかありません。しかし、主なる神様は、ただ厳しいだけではありません。「**今、嘲ることをやめなければ、お前たちの縄目は厳しくなる。わたしは定められた滅びについて聞いた。それは万軍の主なる神から出て国全体に及ぶ**」（28:22）と厳しい言葉の中にも、「嘲る人たち」が立ち返った場合、救いに至る可能性も残されているからです。

ここで述べられている、預言者イザヤを通した主なる神様の言葉は、非常に厳しいものです。またその厳しさから、『聖書（旧約に）』に描かれている神の民イスラエルが、決して模範的な人々ばかりではないことがわかります。しかし、主なる神様は、彼らに対して厳しさを示すと同時に、そのような人間が神様に立ち返ることを望んでおられることもわかります。これらから、本日の旧約日課に「愛」という言葉はありませんが、主なる神様が、その民イスラエルのためなところをしっかりと認識し、叱りながらも、愛している姿が浮かび上がると思います

さて、そのような前提から考えますと、本日の福音書は、少し複雑です。なぜならば、「**主よ、救われる者は少ないのでしょうか**」という質問に対して、イエス様は、「**狭い戸口から入るように努めなさい。言うておくが、入**

ろうとしても入れない人が多いのだ」と答えるからです。さらにそれだけではなく、戸口を閉められて入れなかった人々に対して、「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである」と続くからです。

このイエス様の言葉は、マタイ福音書にある「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」（マタイ7:13-14）という部分と似た響きがあります。また続く部分も、細部は異なりますが、「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」と、自分たちの行動を救いへの証しとして主張されるのですが、「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」と「不義を行うもの」として拒否されてしまう点も同じです。これらの事柄を語るイエス様は、数多くの人を無条件に受け入れ、救いへと導く存在だと思われるイメージとは大きく異なっています。

このイエス様の言葉をどのように考えるべきでしょうか。まず、イエス様の教えを受け入れたキリスト者は、狭い戸口から入った人々であり、このイエス様の言葉の厳しさは、教会の人々に安心を与える言葉であると解釈することができます。旧約日課の「信ずる者」と「隅の石」との関係と同じです。しかし、「そのとき、あなたがたは『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう」というイエス様の言葉は、聖餐式や説教を連想させます。そうなりますと、イエス様を信じてキリスト者になったとしても、狭い戸口を通過したわけではないということになります。

イエス様を通して神様を信じたとしても、狭い戸口を通ったわけではない。そのように考えますと、『聖書（旧約）』の「イザヤ書」の言葉よりもさらに厳しい言葉を、イエス様が語っているということになります。しかし、イエス様の最後の言葉を見ると、単に厳しいだけではないことがわかります。「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」（13:29～30）という部分です。これらのイエス様の言葉は、神の国について語っているのですが、結論は「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」とある通り、救いは人間の理性的な判断を超えた事柄だということです。救いについては、主なる神様にしかわからないということです。それは、当たり前のことなのですが、イエス様は、そのことをあらためて明確にしているのです。

人間の理性的な判断では先のは先であり、後のものは後です。それは、言葉の意味としても正しく、またそうであるがゆえに一つの秩序を生み出す

とも言えるでしょう。しかし、神の国ではそれが逆転することがあるとイエス様の言葉は語るのです。つまり、神の国、あるいは救いとは、人間が正しいと考えたことの延長線上にあるわけではないということです。旧約日課にあったような主なる神様を「嘲る」状態は、明確に狭い戸口から入っていないとわかります。むしろ、自分は努力して狭い戸口から入ったと自覚したとき、その瞬間、傲慢になる恐れがあるのです。教会が他の人間的組織と異なるといえるか否かは、この点を理解しているか否かに関っています。

教会は、神の国と救いを語ります。今日の『聖書』の個所と合わせれば、どのようにしたら、狭い戸口を通ったことになるかについて語っています。しかしそれは、この戸がそれですと教えるわけではありません。それは教会自体の傲慢の始まりであり、教会が誤った道へと進むことの始まりです。たとえそれが、従来信仰という言葉ではなく、社会への奉仕、社会との関りを深める、現代社会で問題になっている事柄を共に担うなどと行為面を強調して同じです。

わたしたちが、教会という交わりから示されるのは、主なる神様のみが正しい方であり、また信頼できるかたであるということです、それは、言い方を変えれば、主なる神様を信頼し、すべてをゆだねる生き方を示されるということです。そして、そこから何かを始めることです。

本日の使徒書は、最後の部分で「このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。 **実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です**」（ヘブライ 12:28～29）と述べ、基本的にイエス様を通して、主なる神様を信頼することの確実性を示しています。その確実性は、人間の主観的な事柄に基づいているのではなく、『聖書（旧約）』に書かれている内容に基づいていると語られています。そして、「**すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス**」とある通りに、主なる神様、信仰の先輩たちのもろもろの霊、最後に新しい救いの契約を担ってくださるイエス様、それら一つではない確かな結びつきによって、その確実さが示されていると語られています。それは、結論として、信じる人々は、最後の仲保者であるイエス様の（十字架の死による）血によって結びつけられているがゆえに、決して揺り動かされることのない神の国を受け継いでいる、それは確証されているということです。

教会に連なるわたしたちが礼拝を通して、主なる神様を信頼すること、そこからこの世界に平和をもたらす歩みが見出されます。世界中の教会の人々とその歩みを見出し、また深めることができるように、イエス様を通して、主なる神様に祈り続け、また主なる神様を信頼し続けたいと思います。